

海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ②)

高島 敬明

1. クラスノダール到着

クラスノダールは、少し紛らわしいのですが「クラスノダール地方」の中心都市なのです。「クラスノダール地方」とはロシアのいくつかの行政区分の一つで、地方旗まで持っています。面積は約7万5千平方キロもあり、日本の面積の20%もの広さで、人口は2014年の資料では約540万人となっているのです。その中にある「クラスノダール市」は、面積が841平方キロ。日本人も何人か住んでいるとかで、当時は30万人ぐらい(2008年の資料では約70万人)の立派な都市でした。市の名前はロシア語で〈赤い恵み〉という意味だそうです。

着陸して早速、皆腰を抜かさばかりの事が起こりました。機内では皆トイレは我慢して間もなく着くからと、着陸してゆっくり用を足したいと思っていたと思うのですが、売店のすぐ横のトイレに行ってみるとびっくり仰天。待機場所からよく見えるトイレには幅1メートルぐらいのボタン式のドアがあるだけで、膝から下は丸見え、便座はないタイプでした。お互いの顔はドアの上に出て、いわゆる「ニーハオ」トイレなので皆しり込みしていましたが、生理現象には勝てず仕方なく「俺が一番先に行くよ」と強がりを言いながら行くものが出始めました。お互い膝から下の新調したズボン、新品の靴が見え全く様になりません。皆大笑いです。とは言ってもこれからの3時間あまりのバスのことを考えれば笑ってばかりでは済まされず、もうどうにでもなれという気持ちになり、我慢できない順に済ませて行きました。最後は何とも思わなくなるから不思議ですね。

皆すっかりとした顔になってから、今回我々と一緒に仕事をするエンジニアリング会社のソ連製の新車のバスに乗り込みました。クラスノダールからノボロシースクまでは直線距離では100キロくらいですが、途中から曲がりくねった山道を行くわけですから150キロはあったと思います。最初は道路は舗装されており快調でしたが、砂利の道になって状況は一変しました。クッションの役目をするショックアブソ

ンバーが付いていないのでは、と思うくらい穴ぼこをそのまま拾って行き曲がるときは反対側に流されるようです。腰、背骨さらに首の付け根まで痛くなるほどです。また閉口したのは、道路のほこりが床のど



通訳のCさん

こからか入っているようで座席もどこもかしこも白くなっていました。おそらく床の配線や配管の穴が完全に塞がれていないからなのでしょう。自動車は日本より相当遅れているなと感じました。

そのうち峠に差し掛かり、山間部を走っているときです。何回も形の違った十字架のお墓が目につくようになりました。共産圏でもキリスト教なんだとぼんやり考えているとき、プカプカと賑やかな楽団を先頭に軍用大型トラックを従えて来る一団に出くわしました。バスと高さが同じになり追い越しざまに荷台を見ると、棺桶があり花で飾られた顔が見えました。魔法の国のおばあさんのような鼻の高いお年寄りのご遺体でした。最初から縁起でもないな、このプロジェクトはケチが付いたのかな、うまく行くのかな、と心配になりました。しかし皆には言わず自分の中だけに納めました。



宿舎のブリガンチーナホテル(1978. 4)



ノボロシースク市内にいくつかある花市場の一つ(1978. 10)

2. ノボロシースク到着

陽が少し沈みかけた頃、ようやくノボロシースク(ロシア語で新しいロシアの町の意味)の街に入りました。無事に宿舎に到着。我々工事関係の人間の宿舎は、港の岸壁の近くの長期航海からの帰還船員の家族の宿泊施設です。一方エンジニアリング会社の技術者と通訳を合せた約15名は市内の高級な「ブリガンチーナホテル」の滞在でした。宿舎は予め部屋は決まっていたのですが、寮長の私から部屋割りを指示します。

作業員は部屋ごとに4～5人ずつ詰め込まれますが、私の部屋は大きな部屋でしかも一人で占領です。労働者の国ですが、労働者の身分に対する差別は大変厳しいのです。私には、部屋付きの女性が何人も付き、シーツを取り換えるだけの人、部屋の掃除だけする人、私の部屋のクルーチ(鍵)の管理だけする人、意味が分からないのですが廊下の端に黙って座っている人、ほかの部屋にはこのような人はいません。

エンジニアリング会社の通訳に言わせれば、私を監視している人達だと教えられました。そう言えば廊下の端に座っている人は、ソ連の旗がなびく赤い共産党員のバッジをいつも誇らしげに付けていました。共産党員だそうですが、この先あまり共産党員に会うことは有りませんでした。珍しいのだそうです。夕食は先に来ていた日本のまかない会社「魚国」の皆さんの計らいで無事に終わり、2日目の夜が更けていきました。

3. ノボロシースクでの生活スタート

3日目の朝が来ました。疲れていたのでぐっすり寝たつもりでしたが、時差(日本とは5～6時間くらい)と緊張感からか暗いうちから目が覚めてしまいました。これから1年間、仕事の中心となる黒海の港を眺めていましたが、ソ連邦崩壊の10年あまり前でしたので光の少ない味気ない光景であったのを思い出します。海

ばかりに気を取られていましたが、背後の海に沿って走る山並みを見ると草木の少ない白い肌の山々が連なっていました。この山々がそれほど遠くないソチからトルコまで連なるのだと思うと感無量でした。連なる山々はカフカス山脈といいます。「ソチ」と言えば、ロシア随一の保養地で2014年冬季オリンピックが開催されたことで世界的にも有名になりました。

朝食を済ませた午前10時頃、日本でお会いしたエンジニアリング会社のYプロジェクトマネージャー(以下プロマネ)、Oサブマネージャーら6人が突然来訪されました。現地の状況について説明したいとのことと、「全員娯楽室に集めていただけますか」と要請されましたので、声を掛け合い床にマットが敷いてある広い部屋に向かいました。この部屋には我々日本人のために片隅に日本の図書や将棋盤などが置かれており、寝そべてくつろげるようにしてありました。ここで1年間過ごすのかと思うと何とも言えない気持ちになりました。途中で一時帰国は無いのですから。家内も1年間不安だったと思います。申し訳なかったと思います。延べ270人くらいがここを生活の拠点としたのですが、その殆どは全体の工程(配管、電気計装、保温、ペンキ等等)の中で自分の仕事が終われば帰国する人たちでした。

さて娯楽室に全員集合の後、歓迎の挨拶がありスタッフの皆さんの紹介が始まりました。Yプロマネ、Oサブマネの他、もう一人の男性のMさんは工程管理のエンジニアだそうです。そのほかは日本人の女性が3人いて、いずれも独身で通訳と紹介されました。以下に簡単に彼女たちを紹介して本稿を終わりとします。

★Aさん…ロシア語、英語の通訳、東大出身のロシア人の彼氏がいた。30歳前半。

★Bさん…東京外大を出たばかりのロシア語通訳、24～5歳。

★Cさん…樺太から15歳の時日本に帰って来たロシア語通訳。ロシア語は完璧。45歳くらい。

女性3人が加わり華やかでいいのですが、これから仕事を進める中でたくましいロシアの男たちと対等に渡り合えそうなのはCさんだけで、ほかの二人は体も華奢で声も頼りなく、このプロジェクトは持つのかなと正直不安を感じました。この時代ロシア語通訳が極端に少なかったのです。

(続く)